

漢語接尾辞「チュウ」(中)の成立に対する考察

——接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の歴史を背景とする——

山田昇平

1. はじめに
2. 問題の焦点
 2. 1. 現代語の「チュウ」「ヂュウ」
 2. 2. 先行研究
 2. 3. 山田(2019)の記述
 2. 4. 問題設定：接尾辞「チュウ」成立過程
 2. 5. 前提
3. 通時的記述
 3. 1. 近世前期の検証
 3. 1. 1. 日相『法華経音義補闕』
 3. 1. 2. 近世前期の接尾辞「チュウ」
 3. 2. 近代期の接尾辞「チュウ」
 3. 3. 接尾辞「チュウ」の成立時期
 3. 3. 1. 断本類による調査
 3. 3. 2. アスペクト的用法について
 3. 4. 小まとめ
4. 接尾辞「チュウ」の成立背景
 4. 1. 漢文脈における接尾辞「中」
 4. 2. 和語表現の表記
 4. 3. 記録文には接尾辞「チュウ」は存在したか
 4. 4. 話しことばにおける接尾辞「チュウ」の成立
5. まとめ
 5. 1. 整理
 5. 2. 方法論上の問題
 5. 3. 意義

本論文では、現代語で【範囲内】の意味を担う漢語接尾辞「チュウ」(中)の成立過程について通時的考察を行った。ここでは主に近世期資料をもとに次の点を指摘した。

- ・近世前期の話しことばには【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」を認めない
- ・近世後期の断本類資料には【範囲内】の接尾辞「チュウ」の確例を確認できる
- ・一方で近世中期の記録文『広橋兼胤公武御用日記』には【範囲内】(アスペクト的用法)をあらわす接尾辞「中」が確認できる

これらのことから、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」は、漢文脈で用いられていたものが近世後期に話しことばへと導入されたとする見通しを提出した。

また、先行研究の指摘を踏まえ、現代語で【範囲全体】をあらわす接尾辞「ヂュウ」との歴史的関係についても整理を行い、日本語のいわゆる清濁の歴史との関係にも言及した。

1. はじめに

本稿は、漢語接尾辞「チュウ」「ヂュウ」(中)の歴史的背景を問題とし、特に【範囲内】の意味をあらわす接尾辞「チュウ」の成立過程について、一定の見通しを示すものである。ここでは、主に近世期について、次の点を指摘する。

- ・近世前期の話しことばには【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」を認めない
- ・近世後期の断本類資料には【範囲内】の接尾辞「チュウ」の確例を確認できる
- ・一方で近世中期の記録文『広橋兼胤公武御用日記』には【範囲内】(アスペクト的用法)をあらわす接尾辞「中」が確認できる

これらから、本稿では【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」は、漢文脈で用いられていたものが、近世後期に話しことばへと導入されたとする見方を提出する。

2. 問題の焦点

2. 1. 現代語の「チュウ」「ヂュウ」

現代語における接尾辞「チュウ」「ヂュウ」は、清音形「チュウ」が【範囲内】の意味をあらわし、濁音形「ヂュウ」が【範囲全体】の意味をあらわすとされる¹⁾。以下に例を示す。

(1) 学校中(チュウ/ヂュウ)に犯人がいる

この場合、「チュウ」は単に学校の内のどこかに犯人が潜んでいることをあらわすが、「ヂュウ」は学校全体に犯人が潜んでいることをあらわし、かつ犯人が複数であることを含意する。このような例から、本稿では前者の意味を【範囲内】、後者を【範囲全体】としている。この意味差は清濁の差に対応することから、一見連濁(形態音韻的な音交替)に伴って意味が変わる事例にみえる。

これに対して、山田昇平(2019:24-26)では、「チュウ」「ヂュウ」の関係を、連濁と区別し、両者を別形態素と判断した。そして、共にその語源が漢語形態素「中」に遡ることから、「チュウ」「ヂュウ」は、通時的には二重語'doublet'の関係にあるとする(p.28)。本稿では、基本的にこの見解に従うが、詳細については2. 5. 節であらためて整理する。

2. 2. 先行研究

接尾辞「チュウ」「ヂュウ」は、共時的にはパラレルな清濁の対をなすようにみえるが、この対は比較的新しく生じたものであることが指摘されており、両接尾辞の通時的成立過程に問題がある。通時的・歴史的な観点から接尾辞「チュウ」「ヂュウ」を扱ったものに鈴木豊 (2014)²⁾ 及び山田昇平 (2019) がある。

鈴木論文は、「チュウ」「ヂュウ」を広い通時態で捉えたものである。ここでは、近世以前には接尾辞「ヂュウ」の形式のみが存在することを確認し、その意味は【範囲内】【範囲全体】が未分化なものであったとする。そして、それが近世から近代にかけて次第に分化し、近代期以降に現代語的な関係が成立したとする。一方で、山田論文は、中世末期・近世初期を一つの共時態として設定し、当該時期の「チュウ」「ヂュウ」を考察する。これによれば、鈴木論文と同じく、当該時期には接尾辞「ヂュウ」の形式のみが確認される。一方で、山田論文ではその意味に【範囲全体】のみを認め、【範囲内】を認めない。

つまり、中世末期・近世初期頃を取り上げると、両論とも接尾辞「ヂュウ」のみの存在を指摘する点では共通しているが、その意味に対する判断が異なる。このうち、鈴木論文については、山田論文で批判される通り、その方法に疑問があり、同意できない。山田論文は、中世末期のキリシタン・ローマ字資料及び近世初期の内省記事に基づくもので、本稿ではこちらを支持する。

2. 3. 山田 (2019) の記述

上記の山田 (2019: 39) の主張を確認する。同論では、漢語形態素「中」に由来する形式を、接尾辞と二字漢語後部要素に分けた上で、中世末・近世初期の記述結果を次のように整理する。

	チュウ	ヂュウ
接尾辞	—	【範囲全体】
二字漢語	【範囲内】〔清濁は音環境に依存〕	

これによれば、当該時期に【範囲全体】の意味を持つ接尾辞「ヂュウ」は存在するが、【範囲内】の意味を持つ接尾辞「チュウ」は存在しない。これに対して、二字漢語後部要素の「中」が【範囲内】の意味を持つ形式として存在す

る。二字漢語後部要素「中」の清濁は、音環境に依存して決定し、意味的な対立はない。つまり、当該時期には、語構成上の出現位置が異なる接尾辞「ヂュウ」と二字漢語後部要素「中」との間に意味差が確認される。これについて、同論では、現代語のような別形態素として捉えるのではなく、語構成上の位置によって同一形態素（「中」）がその用法と形態を変えていると捉える³⁾。そのため、形態上にあらわれる清濁の差は、意味対立には直接関与しないとみなし、主に漢語形態素「中」の語構成上のふるまいの指標（二字漢語後部要素：接尾辞）としての役割を担うと考える⁴⁾。

2. 4. 問題設定：接尾辞「チュウ」成立過程

接尾辞「ヂュウ」の意味を「未分化」とする鈴木論文では、近世期に【範囲内】と【範囲全体】のゆるやかな意味分化が進み、近代以降に明確な【範囲内】の意味が確認されるとしていた。しかし、本稿では、前節の共時的な関係性を認める立場をとる。その場合、先に【範囲全体】をあらわす接尾辞「ヂュウ」が生じているとするため、【範囲内】の意味をあらわす接尾辞「チュウ」が別に（上図の「一」部分を埋める形で）成立することで、現代語的な接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の関係が生じたと考えることになる。

そのため、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が、いつ、どのように成立したかが問題となる。本稿はこの問題を明らかにすることを目的とする。

なお、鈴木論文・山田論文では、変化の位置づけこそ異なるものの、いずれも近世期に変化の契機を認める点では一致している。このうち、山田（2019：40）では「現代語のアスペクト用法」に通じる「留守中」の例を嚆本からあげた上で、【範囲内】をあらわす「チュウ」の成立について、「アスペクト的用法から出発したと予想」する。

以下の考察にあたって、このような予想は参照すべきだろう。

2. 5. 前提

本稿における考察の前提を確認しておく。本稿では「チュウ」「ヂュウ」を扱うにあたり、次の通りの立場をとる。詳しい検証は山田（2019）を参照。

A 接尾辞「チュウ」「ヂュウ」と二字漢語後部要素「中」を分けて扱う。

現代語において「チュウ」と「ヂュウ」は意味に対応するが、二字漢語後部要素「中」の清濁は音環境に依存するため。山田（2019）では現代語の二字漢語後部要素で「ヂュウ」の形をとる例として次の例

をあげる。

しんじゅう ねんじゅう れんじゅう こうじゅう ろうじゅう
心中・年中・連中・講中・老中

情死の意味を持つ「心中」や集団をあらわす「連中」「講中」「老中」は、やや特殊な例と言える。また、いずれも撥音や長音に後続するといった点を指摘でき、いわゆる「連声濁」や「うむの下濁」と言われる現象との関連が窺われる。そのため、「チュウ」「ヂュウ」の音形の出現条件は接尾辞と二字漢語後部要素とで異なるといえる。この他、語構成上の観点⁵⁾からも接尾辞「チュウ」「ヂュウ」と、二字漢語後部要素「中」とは分けて扱うべきだろう。この点については過去の日本語についても同様に捉える。

B 接尾辞「チュウ」と接尾辞「ヂュウ」は、別形態素と判断する。つまり、連濁によって生じる異形態に対応した用法差とはみない。これは次の2点による。

a. 両者は基本的意味に差がある

「チュウ」は接続対象の語が持つ範囲の【範囲内】をさす。

「ヂュウ」は接続対象の語が持つ範囲の【範囲全体】をさす。両者には次のような対立例を作ることが可能である。

学校中（チュウ／ヂュウ）に犯人がいる。

チュウ：学校の中（のどこか）に犯人がいる

ヂュウ：学校全体に犯人がいる（複数であることが含意される）

b. 両者は接続範囲に差がある

「チュウ」「ヂュウ」ともに空間的な語・時間的な語に接続するが、「チュウ」は比較的漢語に偏る傾向がある。また、「チュウ」は動詞的な語にも接続し、当該の動作が一時的に継続しているといったアスペクト的意味をあらわす（アスペクト的用法。【範囲内】の意味における一用法と捉える）。この場合、語種上の制限はない。

資料中 [シリョウ（チュウ／ヂュウ）] に誤字がある：

漢語・空間的

vs. この紙中 [カミ（*チュウ／ヂュウ）] に汚れがある：

和語・空間的

今日中 [コンニチ（チュウ／ヂュウ）]：漢語・時間的

vs. 今日中 [キョウ (*チュウ/ヂュウ)] : 和語・時間的
考察中 [コウサツ (チュウ/*ヂュウ)] : 漢語・動詞的

vs. 考え中 [カンガエ (チュウ/*ヂュウ)] : 和語・動詞的

以上から、本稿では現代語において、漢語形態素「中」に由来する形式に、接尾辞「チュウ」・接尾辞「ヂュウ」・二字漢語後部要素「中」の三種を認めることになる。

両接尾辞の基本的意味・接続範囲を、次の通りにまとめておく⁶⁾。

接尾辞「チュウ」:【範囲内】をあらわす。空間的な語・時間的な語・動詞的な語に接続する。空間的な語・時間的な語については漢語に接続しやすい。動詞的な語に接続する場合はアスペクト的用法を持つ。

接尾辞「ヂュウ」:【範囲全体】をあらわす。空間的な語・時間的な語に接続する。語種制約はない。

これらは現代語を共時的に捉えたものである。次節でも確認する通り、過去の接尾辞「ヂュウ」については山田(2019)に従う。本稿は近世期における接尾辞「チュウ」を中心に扱う。過去の日本語についての考察を行うためには、時代毎に共時的な言語記述を行う必要がある。しかし、以下の考察で示す通り、特に接尾辞「チュウ」の用例は、近世以前において共時的記述を行うのに十分な量を得られない。そのため、ここでは、過去の接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の意味・用法の確認は、通時的に連続する現代語における【範囲内】【範囲全体】の基本的意味で解釈可能かを、便宜的な基準とする。

3. 通時的記述

3. 1. 近世前期の検証

山田(2019)では近世初期の口語において【範囲全体】の意味を持つ接尾辞「ヂュウ」の存在のみを認める。まずこの点をあらためて検証しておく。

3. 1. 1. 日相『法華経音義補闕』

まず山田(2019)では、キリシタン・ローマ字資料中に接尾辞としては「ヂュウ」の例のみを確認するが、それらの意味については【範囲内】・【範囲全体】の判定がほぼ困難とする。その上で、日蓮宗僧侶である日相(1635-1718)があらわした『法華経音義補闕』(元禄七(1694)年成立・同十一(1698)年刊、以下『日相音義』)の記述を利用する。

- (2) 満虚空中^{【平・新濁】}文 中ノ字濁テヨムヘシ。下ノ於空中^{【平・新濁】}減同レ之^二。
 上ノ於虚空中^{【平】}トハ別ナリ今此ノ中ノ字非^二中央ノ義^{ニモ}。非^二内也ノ訓^{ニモ}。
 今ハ満也ノ訓^{ニテ}虚空中^ニ遍満^{スル}義ナリ爾^ヲハ濁テヨムヘキコト明ケシ。満
 也ノ訓^ト者京中^{【平・新濁】}田舎中^{【平・新濁】}ト云時ノ中^{キナカ}ヲ満也ノ訓^ト云ナリ

日相『法華經音義補闕』卷五27丁裏

(声点は【 】で示し、引用中の合字は開いた。以下同じ)

(2) では、「中」字を清濁のいずれかで読むかによって、意味が異なるとする。見出しとなる「虚空中」が「非^二中央ノ義^{ニモ}。非^二内也ノ訓^{ニモ}」ものであり、「満也ノ訓」・「遍満^{スル}義」と解釈されるため、「濁テヨムヘキコト明ケシ」とする。ここでは濁る場合のみに触れているが、次の(3)では「内也ノ訓」である場合に、清むべきとする。

- (3) 住虚空中^{【平】}文 中ノ字内也ノ訓ナリ。清^テヨムヘシ。連聲ナリトテ
 濁^テヨムハ不可也。次下ノ於虚空中^{【平】}亦同レ之^二。 同卷三4丁表

山田(2019)では同書の内部徴証から、これらの記述を日相の内省に基づくものとする。そして、これを根拠に日相が「チュウ」「ヂュウ」に、それぞれ【範囲内】【範囲全体】の意味を認めていたとする。また、主に中世末の用例に接尾辞「チュウ」が確認できないことから、ここで「内也ノ訓」(=【範囲内】)をあらわすとされる「チュウ」は、二字漢語後部要素の「中」や、「虚空中」のような漢文脈での使用例に基づく意識とし、接尾辞の例とは区別し、口語においては【範囲全体】をあらわす接尾辞「ヂュウ」のみを認める。

3. 1. 2. 近世前期の接尾辞「チュウ」

中世末期のキリシタン資料には、実際に接尾辞「ヂュウ」が【範囲全体】をあらわす確例が得られない。これについて、山田(2019: 33, 注11)が露五郎兵衛の断本類から【範囲全体】をあらわす「ヂュウ」の用例を示しており、近世前期の例として従える。

一方で、山田論文の検証のためには、当該時期の口語に【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が用いられないことを示す必要がある。特定の言語形式の非存在を示すのは困難であるが、この点について、『西鶴諸国ばなし』にみられた接尾辞「ヂュウ」と和語表現の使用差を支持材料にあげる(表記は原本画像に従う。ただし、句読点・「」・下線は私に補った。以下同じ)。

- (4) (娘は)婿見競し折ふし、風のここちとなやみけるに、京中の薬師
 に掛て、さま／＼かんびやうすれども甲斐なく、惜や眠がごとく、

世をさりける

- 『西鶴諸国ばなし』貞享二〈1682〉年刊 卷三「面影の焼残り」
(5) 此男夜に入、月影をしつきかげのび、京中きやうなかにゆきて、うつくしき娘むすめを盗て、
二三日もあかへいては、又帰しぬ。 同 卷二「男地蔵」

いずれも『西鶴諸国ばなし』における「京中」の例であるが、(4)は「きやうぢゆう」、(5)は「きやうなか」と振る。「京中」(キョウヂユウ)は二字漢語であるが、「京」は当該時期にも単独で使用される独立した形式であり、(4)の「中」は接尾辞の例と認める。(4)の意味は【京全体の(複数の)薬師】といった、【範囲全体】ととるべきものである。一方で、(5)の「きやうなか」は「ゆきて」という方向の対象であるため、【範囲内】の意ととれる。つまり、【範囲全体】の場合は「きやうぢゆう」、【範囲内】の場合は「きやうなか」という、意味差に応じた読み分けととれる。これは、仮に【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が存在していれば、対となりうる「キョウチュウ」の語形の選択も予想されるところである。しかし、実際には同資料や他の西鶴資料(「新編日本文学全集」を範囲とする)などに接尾辞「チュウ」は確認されず、(5)のような場面では和語表現が選択されている。このことは、接尾辞「チュウ」の非存在を窺わせる。

もっとも、(4)(5)などは文語的文体をとる。これは口語的資料とはみなせないことから、文体上の問題と考えることもできよう。しかし、そうであっても、接尾辞「ヂユウ」が用いられる文体において、対になるべき表現に接尾辞「チュウ」ではなく、和語表現が選択されていることから、接尾辞「ヂユウ」と接尾辞「チュウ」とが少なくとも同一の位相内で使用されないことを重視すべきだろう。このような状況から、話しことばにおいて、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が、接尾辞「ヂユウ」ほど生産的に使用されていないと判断する。同様の例を「浮世草子」の類からも挙げておく。

- (6) ある時長崎の底ぬけといふ大臣、遣放の勤吉といふ太鼓持に目をかけられ、京都にて買物かいものなさるゝ御逗留中ごとうりうちゆうは、ひざもとさらずの御意ごいに入いりにて、外を欠て此大臣に勤めけるに、「ちと勤吉によべ」とあ
る。 『傾城禁短気』正徳一〈1711〉年刊卷六 第3

- (7) 大坂の御堂へ参り、逗留とうりうの中同行衆うちどうぎやうしゆにさそはれ始はじめて新町へ参り、
同 卷二 第4

(6)は京都で逗留している間ずっと、「御意に入り」であったと、【範囲全体】ととることができる。一方で、(7)は大坂に逗留のしている際に、はじ

めて新町に行ったという【範囲内】における一回性の行動ととれる。現代語と対照するならば、このような文脈には「チュウ」の使用が期待されるが、和語表現の「ノウチ」が使用される。

以上から、本稿でも近世前期の話しことばにおいて、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」は生産的に使用された形式と認めがたいと判断する⁷⁾。

3. 2. 近代期の接尾辞「チュウ」

次に、比較的資料を得やすい近代の状況を確認しておく。当該時期の初期には【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」と、【範囲全体】をあらわす接尾辞「ヂュウ」とが、いずれも確認できる。例えば、ヘボン著『和英語林集成』第3版は両者を別に立項する。

(8) CHŪ チウ 中 (naka). Middle; centre; middling in quality; medium; in; within; during; whilst; in the course of; throughout; *jō* — *ge*, superior, middling, and inferior; *kok* —, in the country.

『和英語林集成』第3版 p. 62

(9) JŪ チウ 中 (coll. *nigori of chū*) The whole, all; *sekai-ju*, the whole world; *kunijū*, the whole country. 同 p. 232

同書の‘CHŪ’（チュウ）と‘JŪ’（ヂュウ）との語釈は、概ね【範囲内】と【範囲全体】とに対応する⁸⁾。ただし‘CHŪ’の語釈にみられる用例 *kok*-は二字漢語「國中」を示し、接尾辞の確例とは言い難い。しかし、『安愚楽鍋』のような近代初期口語的資料をみると接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の形式が確認できる。

(10) 梅はさいたかもけい^{ちう}中^{きやく}のくせに客のえりきらひをしてすこしむかふづらがいいと自惚^{うぬぼれ}きつて

仮名垣魯文『安愚楽鍋』明治〈1871〉年成立 二編下「歌妓の坐敷話」

(11) 日本一でおもひだしたが^{とうけいちう}東京中^{たから}の宝をあつめて^{あまぐさ}浅草のおく山で博覧会^{はくらんくわい}をするつもりだから 同 二編上「半可の江湖談」

京都・江戸（東京）の方言差については問題が残るが、これらの例から、ひとまず近代初期には「チュウ」「ヂュウ」がそれぞれ【範囲内】【範囲全体】の意味を持つ接尾辞として成立しているとみておく。

3. 3. 接尾辞「チュウ」の成立時期

近世前期の話しことばには【範囲全体】を担う接尾辞「ヂュウ」のみが存在

すると判断し（3. 1. 節）、近代初期の口語的資料に接尾辞「チュウ」（【範囲内】）「ヂュウ」（【範囲全体】）の両者が存在することを確認した（3. 2. 節）。このことから、【範囲内】を担う接尾辞「チュウ」は近世期を通して成立したという先行研究の予想を追認できる。以下では、近世期資料をもとに、その成立時期を推定する。

3. 3. 1. 断本類による調査

ここでは、当該時期を通して同一文学ジャンルから用例を得ることを目的に、『断本大系』所収の断本類を資料に選択する（検索には国文学研究資料館「断本大系本文データベース」を用い、可能なものについては原本画像を確認した）。これにより、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」の使用時期を確認する。

なお、近世期文献資料から用例を得るにあたり、当該時期の表記上の特徴（濁点の非表示・振り仮名の有無）から、語形の認定が問題となる。本稿ではこの問題に対して、次の方針で処理する⁹⁾。

濁点及び振り仮名のない「中」も、接尾辞（非二字漢語後部要素）として【範囲内】をあらわしていれば、その語形は「チュウ」とみなす

この結果、対象範囲内で、接尾辞「チュウ」と判断したのは、以下の3例である¹⁰⁾。

- (12) なんと太右衛門さん。お前^{まへ}、遠^{ゑん}しうへ上^{ぜう}るりに御出^{おいて}なされますれハ、
定^{さだめ}て御うち女中^{ぢゆうぢゆう}子衆^{こどもしゆ}ばかりで御ざり^すま升^る。また留主^{りゆうしゆ}中^{ちゆう}御見^{おみ}まひ
にも参^{まい}りますが、日本橋^{にっぽんばし}でお名^なハなんと申^{もうし}上^{ます}ぞ。

- 『臍の宿かえ』文化九〈1812〉年
(13) きさらぎ中^{ちゆう}の五日、ねはん会^ゑと有^あて、かの餅花^{もちばな}をむしり、お釈迦^{しやか}さま
まのはなくそといふて、仏前^{ぶつぜん}へそなへてあるが、なんと、あれハも
つたない事^{こと}でハないか。 『会席断袋』文化九〈1812〉年

- (14) 実に其御連中^{ごれんぢゆう}で、狂言中^{きやうげんぢゆう}にあくびの一つもしやう物なら、舞台で
そゝる人でも、かくべつ氣をいれませう

『梅屋集』慶応元〈1865〉年

(12) の「留主中」は、「御見まひ」が、「留主」の間毎日のように続くという宣言であれば【範囲全体】ととれる。そのようなことは想定可能であるものの、蓋然性に乏しい。よって、【範囲全体】よりも【範囲内】と取るべきだろう。また、(14) の「狂言中」は「あくびの一つ」と限定的な表現を伴うこ

とから、多数に及ぶことを想定しているとは考えにくい（ただし、(14)は原本の確認が出来ず、「嘶本大系」のみによる。また(12)(13)が京阪資料であるのに対し、(14)は江戸資料であることにも注意が必要だが、ひとまず用例に含めておく）。(13)の「きさらぎ中の五日」もやはり「五日」に限定されているため【範囲内】といえる。

よって(12)(13)(14)は【範囲内】とみなすことができ、接尾辞「チュウ」の例と判断する。このことから用例数は少ないものの、近世後期には【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が、口語的な資料の上で用いられているということが指摘できる¹¹⁾。

ここで確認したのは「留守中」「きさらぎ中」「狂言中」の3例のみであるが、これらを重視するならば、いずれも時間的な範囲を示し、時間的要素への接続例といえる。

3. 3. 2. アスペクト的用法について

なお、(12)は山田(2019:40)で「現代語のアスペクト用法に通じる」例として挙げる。しかし、アスペクト的用法の明確な判断基準については、大島弘子(2010:121)が現代語の接尾辞「チュウ」について、その語が述語として振る舞うもの(「今は留守中だ」など)に限るとする定義が有効であろう¹²⁾。よって、この用例について、本稿ではアスペクト用法とはみなさない。

3. 4. 小まとめ

以上、次の3点を指摘した。

- i. 近世前期話しことばに接尾辞「チュウ」の生産性を認めない
- ii. 近代初期口語資料には接尾辞「チュウ」が確認できる
- iii. 嘶本類を資料とすると、近世後期に接尾辞「チュウ」の確例を少数確認できる

iiiについては、用例数が乏しく問題が残るものの、本稿における見通しとして、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が話しことばに用いられるのは、近世後期ごろと判断する。

4. 接尾辞「チュウ」の成立背景

接尾辞「チュウ」は近世後期ごろに、話しことばとして用いられるようになったとした。以下では、このような通時的過程が生じた背景を考察する。

4. 1. 漢文脈における接尾辞「中」

山田(2019)では「日相音義」の「チュウ」に関する内省が、二字漢語や漢文脈に基づくものと想定していた。このうち、漢文脈に関しての想定に従うなら、近世初期頃には漢文脈において接尾辞「チュウ」が存在していることになる。これを受けて、時代は下るが近世中期頃の公卿である、広橋兼胤(1715-1781)による日記『広橋兼胤公武御用日記』(寛延三(1750)-安永五(1776)年)をみる。その結果、以下のような【範囲内】の意味であり、かつアスペクト的用法の接尾辞「中」の例が確認された(検索・閲覧は東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」による。引用に際して表記は『大日本古記録』に準じるが、旧字は新字にあらためた。なお、ここで同日記を資料とするのは、京都方言話者による比較的日常的な漢文脈使用の一例であり、かつある程度まとまった量を扱えるという、便宜的な理由による)。

(15) 一、参内、前大樹違例之处不相勝段申来候由、附平松中納言言上(時行)
〔割書省略〕、且申伺云、様体御尋、当時伊予守差扣中_二候間、松
平右京大夫江自兼胤以書状可申達候哉 同 宝暦十一年六月十四日

(16) 一、上・下御霊社神幸、去月十八日依鳴物停止中延引、来五日神幸
有之候、 同 宝暦十一年八月朔日

(17) 内侍所千反楽被行御先格之处、此度諒闇中故、御千度被行御供米可
被進之由、先達_二兩人及内談候、 同 宝暦十二年十月四日

(15)は、前将軍(徳川家重)が病という情報に対する、平松中納言(平松時行)への伺いである。前将軍の容態の尋ねなどは、本来は現所司代である伊予守(阿部正右)に行うべき所であるが、伊予守が「差扣中」であるため、前所司代である松平右京大夫(松平輝高)へ申達すべきかの判断を時行に仰ぐ。ここでは「差扣中_二候間」とあるが、「差扣中」にコピュラ的表現としての「候」が続くため、これが従属節内の述語となっていることが分かる。本稿ではこのような「中」を、3. 3. 2節で示した基準に従って、単なる時間的範囲に留まらず、その状態が一時的に継続することをあらわす、アスペクト的用法での使用例と解釈する。

(16)は上下の御霊神社の神幸が、「鳴物停止中」であるため、先月十八日から、次の五日へと延引されたとする。「依鳴物停止中」は、接続表現である「依」が用いられることから、「鳴物停止中」が従属節内の述語として振る舞う。そのため(15)と同様に、アスペクト的用法と解釈する。

また、(17)は、従来から懐妊していた大奥の女中が臨月を迎えるという江

戸からの情報に対し、先例に従い内侍所神楽（「内侍所千反楽」）を行うべき所であるが、前將軍逝去にともなう「諒闇中」であるため、これを「千度祓」に替える旨を、既に伊予守と内談していたとする。これについても、「故」が接続表現であるため、「諒闇中」を従属節内における述語とみなし、アスペクトの用法と解釈する。

つまり、これらの「中」は接尾辞として使用され、現代語の接尾辞「チュウ」と同様のアスペクト的用法で用いられる。本資料にはこのような「中」の使用が、一定数確認できる。以下の表には、形の上から判断できるものとして、先にみたような動詞的な語に接続する「中」で「一二候」「依一」「一故」の形式をとるものの用例数を挙げておく。

表 1

	一二候	依一	一故	合計
接尾辞「中」	10	2	9	21

4. 2. 和語表現の表記

この「中」表記は「～ノナカ／ウチ」といった和語表現である可能性も疑われる。しかし、本資料では、別に「之中」が使用されており、使用の文脈が異なる。

(18) 一、田付（景林）を以伊予守より心得_二内々尋越、贈位 宣下いつ頃_一も可有之哉之由、当月十六日比より廿日比迄之中_二可有之示了、
同 宝暦十三年四月七日

(19) 例年帰洛之一兩日之中雖返上、自今年於関東拝領物減候得者甚難決候間、帰洛返上暫延引致度候、
同 宝暦十二年正月廿一日

(18) は兼胤が所司代に対して（景林を介して）、徳川家光の御台所など¹³⁾への贈位を行うにあたり、その宣下の日程を「当月十六日比より廿日比迄之中」と指定する。このような和語表現が相当する箇所には「之中」が用いられていることがわかる。

また (19) は、兼胤の、東行の際の拝借銀に関する、禁裏付への申し入れの内容で、例年は帰洛後「一兩日之中」に返上していたものを、今年から江戸での拝領物が減ったため、返上を引き延ばしたいとする。

これらの例から、本資料において口語における和語表現「～ノナカ／ウチ」

と対応するのは「之中」であり、「中」は対応しない。よって、表現意図に応じて書き分けていると解釈し、「中」は漢語表現をあらわすと判断する。

なお、以上は時間的な範囲に関する例であるが、本資料では空間的な範囲をあらわす例にも「之中」が用いられる。

(20) 一、撰政殿被仰、両御殿古物之中何_二も妙法院宮（堯恭入道親王）_一被下度御沙汰候、 同 宝暦十三年四月十三日

(21) 一、土山淡路守（武真）申、御普請方御褒美之中、延享度大工頭・支配勘定へ被下物白銀五枚充と留書ニ有之

同 宝暦十三年六月廿五日

(20) は「撰政殿」が、清涼殿・常の御殿（この当時普請中）でかつて使われていた「古物之中」から、何かを堯恭入道親王へ下されたいとする。(21) は清涼殿等の普請を行った者たちの「御褒美之中」で、大工頭・支配勘定への割り当てが留書には「白銀五枚」とある（が、実際にはこれは誤り）とする。

いずれも、具体的なモノの中における範囲を示したものである。このような例には同資料では接尾辞「中」は用いられない。

4. 3. 記録文には接尾辞「チュウ」は存在したか

以上確認したところでは、『広橋兼胤公武御用日記』には【範囲内】をあらわす接尾辞「中」が存在していることがわかる。これらのうち、例えば(15)の「差扣中」などは、和語表現への接続例ととることができ、かなり現代語の使用に近いようにみえる。兼胤の書きことばにおける「中」は、【範囲内】をあらわす接尾辞として十分な生産性を有していたことが窺えよう。

また、この接尾辞「中」が「チュウ」の語形で認識されたかについては、「食中」や「病中」といった【範囲内】をあらわす二字漢語後部要素「中」が、当該時期にも基本的には「チュウ」と読まれることや、「日相音義」の記述を参照するならば、そのように捉えても不自然ではない。

このことから、本資料にみられる【範囲内】をあらわす接尾辞「中」は、近世後期における【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」に連続すると判断する。

4. 4. 話しことばにおける接尾辞「チュウ」の成立

口語的資料における【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」の用例は、近世前中期には確認されず、近世後期に確認できる(3. 3節)。この一方で、近世中期の記録文には明らかに【範囲内】をあらわす接尾辞「中」が確認できる

(4. 1節)。

これらの点から、本稿では話しことばにおける接尾辞「チュウ」は、漢文脈(記録文を含む)から摂取された言語形式と判断する。この摂取が行われた背景として、以下の3点をあげる。

- a. 接尾辞「中」の文体的制約の解消
- b. 話しことばにおけるアスペクト的用法の需要
- c. 接尾辞「チュウ」との対立意識の存在

aは漢語の浸透に関係する。日本語史上の大きな傾向として、漢語の日常語への浸透があげられる¹⁴⁾。近世中期の漢文脈にみられる接尾辞「中」が、近世後期話しことばの接尾辞「チュウ」へと連続するならば、それはこのような傾向に準じるものだろう。ただし、前近代において、いわゆる「言文二途」の状態が続くとされるように、その隔たりの大きさは無視できない。漢語の浸透といった傾向があるにしても、具体的な変化を捉えるためには、各形式ごとの背景を考慮しなければならない。b、cはそれを踏まえたものである。

bについて、まず中世末期以降の資料からは、接尾辞「ヂュウ」は和語への接続例が確認されるなど、かなりの程度話しことばへも浸透していると考えられる。一方、近世中期ごろまでの「チュウ」は、口語的資料における接尾辞としての使用例は確認されない。確認されるのは、記録文などにおける接尾辞「中」であり、文体的位相が異なる。

このような文体的位相差が存在した背景には、口語的資料・あるいは和文体において、【範囲内】をあらわす際には「～ノナカ」や「～ノウチ」といった和語表現が可能であり、時間的・空間的要素に接尾辞として「チュウ」を接続させる必要性が生じない、といったことが挙げられよう。これは現代語においてもアスペクト的用法を除けば、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が、和語には接続しにくいことにも窺える(2. 5節)。一方で、接尾辞「ヂュウ」の【範囲全体】の意味は、単純な和語表現ではあらず、漢語出自であっても、日常の話しことばにおいて独自の位置を占めうるものであった。また、これが固有語の現象である連濁と同じように、濁音化していた点も関係しよう。

これに対し、近世中期の『広橋兼胤公武御用日記』における接尾辞「中」は、特に時間的表現に接続し、アスペクト的用法で用いられる例が確認された。ここにみられるアスペクト的用法は、先に確認したように和語表現と対応する「之中」とは区別され、代替可能なものではない¹⁵⁾。つまり、少なくとも当該時期の漢文脈において、接尾辞「中」は独自の用法を獲得していることが分か

る。これは、話しことばにおいても、表現としての需要を持ちうる。なお、近世後期における用例にはアスペクト的用法としての使用は確認できなかったが、(12)・(14)などは、むしろこの用法における使用から転じたものとみる。

また、cについて、(2)の「日相音義」にみた通り、当該時期の話者の言語意識においては「チュウ」と「ヂュウ」とは対照的に捉えうるものであったといえる。つまり、近世前中期の（少なくとも漢文脈に関するリテラシーを持った）話者にとっては、接尾辞「チュウ」・「ヂュウ」は、使用文体は異なるが、個人の言語意識下では対立しうるものであった。このような対立意識が備わっており、かつこの形式が表現上の独自性を持つのであれば、話しことばの場において接尾辞「チュウ」が選択されることは十分に考えられる。

接尾辞「チュウ」の漢文脈における発展過程や、具体的な話しことばへの導入過程といった点は、現段階で未詳であるが、近世後期ごろに接尾辞「チュウ」が漢文脈から話しことばへ撰取されたとする解釈には、歴史的な必然性を見出すことができよう。

5. まとめ

5. 1. 整理

以上の考察に基づいて、あらためて【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」と【範囲全体】をあらわす接尾辞「ヂュウ」の歴史的な関係を整理し、変化の見通しを示す。

中世末・近世初期の段階で接尾辞としては「ヂュウ」のみが存在し、【範囲全体】をあらわした。また、【範囲内】をあらわす形式としては二字漢語後部要素「中」があり、両者は漢語形態素「中」の語構成上のふるまいの差としてあらわれた。また、両者の清濁の差は、語構成上の指標となるものであり、直接意味差に関与しない。

近世前中期の話しことばにも接尾辞「チュウ」の存在は認められないが、漢文脈には接尾辞「中」が確認される。接尾辞「中」には【範囲内】の意味の内、特にアスペクト的用法で用いられるものがある。

近世後期には、口語的資料に接尾辞「チュウ」ととれる例が少数確認され、【範囲内】をあらわす。このことから、話しことばにおいて【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が成立しているとみなす。成立の背景には、漢語の浸透の傾向、和語表現では代替不能なアスペクト的用法の獲得、接尾辞「ヂュウ」との対立意識の存在があげられる。

5. 2. 方法論上の問題

本稿では、文献資料にあらわれる「中」で、【範囲内】の意味で解釈可能なものを、接尾辞「チュウ」の確例と判断するという方法をとった。この方法により、清濁表記の問題への解決を図った。しかし、この方法をとったとしても、当該の「中」が、【範囲内】なのか【範囲全体】なのかを明確にしがたい場合が圧倒的に多く、用例数が限られたものになった。特に本稿は、通時的変遷の全体像を得ることを優先し、断本類を中心資料として扱った。当然この範囲で得られた用例が少数であっても、確例である以上、その存在は重視すべきで、これにより当該時期に確実に【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が存在していることが指摘できる。しかし、用例数の乏しさから、当該時期におけるその用法や、使用場面などは明らかに出来ない。

また、現代語における接尾辞「チュウ」は空間的範囲をあらわしうるが、本稿の範囲内では確認できない。これが実際に口語における非存在を意味するか、資料上の不表出かは本稿の範囲では明らかにしがたい。例え不表出であったとしても、接尾辞「ヂュウ」と接尾辞「チュウ」の対立例が確認できない以上、両者を互いに別意味の形態素とみなすのはためらわれる。

これらの点について、より詳細な調査が必要である以上、本稿の主張は見通しに留まらざるを得ない。

5. 3. 意義

このような問題を認めつつ、本稿が持つ意義を大局的に示しておく。

山田 (2019) では、「チュウ」「ヂュウ」の清濁の差は、漢語形態素「中」の語構成上のふるまいの指標であったものが、接尾辞「チュウ」の成立により意味差を担う指標へと変化したとしていた。これは、個別の事象という限定はつくが、語構成表示 (連濁的) から意味対立表示 (音素対立的) を担う役割のシフトといえる。本稿の考察は、このような清濁差の役割のシフトが、同一形式からの単純な分化ではなく、同一の漢語形態素の異なる共時態における、再度の接尾辞化によって生じている (ここでは漢文脈からの形式の摂取を契機とみる) ことを示したものである。

日本語における清濁の差は、連濁 (/kame/ 「亀」—/midorigame/ 「緑亀」) のような、同一形態素の異形態の差に表れる場合と、別形態素の対立項 (/ka/ 「蚊」—/ga/ 「蛾」) となる場合がある。現代語の接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の清濁差は、語源的には共に漢語形態素「中」に遡る一方で、意味の差が

ある。これは、いわば清濁の持つ二つの側面の中間に位置するような、特殊な事例といえる。本稿は、そのような事例が生じた歴史的背景を具体的に論じた。もっとも、清濁に関わる変化の全体像や、他の個別の事例の実情は、明らかではなく、清濁の歴史全体におけるこの事象の位置付けは、今後の課題とする。しかし、ここで述べた「語構成表示から意味対立表示へ」という変化の方向性とその背景は、清濁の歴史を論じる上で示唆的なものといえよう。

注

- 1) 森田良行 (1984 : 177-179)、水野義道 (1984) など
- 2) なお山田 (2019) において同論文を鈴木豊 (2013) としていたが、実際の発行年は2014年で、誤りである。執筆者である山田の過失であり、本論をもってこれを訂正の上、慎んでお詫び申し上げます。
- 3) 統語的に対立する別形態とみないのは、日本語の形態音韻の特徴から、この場合は清濁の差を連濁 (語構成による濁音化) と同様に捉えうる点による。
- 4) 「語構成上のふるまいの指標」という点について、山田 (2019) で述べられているものの、説明が不足しており、意図が取り難い。本稿においてあらためて説明を加える。
ここで述べるように、当該時期には漢語形態素「中」の【範囲内】【範囲全体】の差は、二字漢語後部要素／接尾辞といった、語構成上の差によって生じる用法差と考える。また、接尾辞として使用される際には、ほぼ自動的に濁音形の「ヂュウ」の形をとる。一方で、二字漢語後部要素の場合は、「心中 (シンヂュウ : 心の中の意)」のように、いわゆる連声濁によって「ヂュウ」の形をとる場合があるが、その場合、【範囲内】をあらわす。そのため、当該時期における「ヂュウ」「ヂュウ」の清濁差は語構成・音環境によって生じる差といえ、両者は相補分布の関係にある。この清濁の差は余剰的といえるものの、語構成に応じてあらわれるという側面から、その語構成差を示す指標として機能しえたものと考えられる。
- 5) ここで接尾辞として認定しているものは、主に単独で用いることが可能な要素に接続する「チュウ」「ヂュウ」である。一方で、二字漢語後部要素の場合、接続するのはほぼ独立して用いられない漢語形態素に限られる。このような差について、例えば影山太郎 (1993) では、前者が接続するものに相当するものを「語幹」、後者を「語根」(「漢語系の語構成要素の中で最も小さい単位」として定義するなど、語構成上の観点からは両者を別物として分類する処置をとる。例え同一の形態素であったとしても、このような振る舞いの差がある以上、考察の上で両者は分けて扱うべきである。
- 6) ここで示す【範囲内】【範囲全体】の意味は、これらの接尾辞の「基本的意味」として抽出したものである。しかし、特に時間的要素に接続した場合など、実際の使用例において、この差は不分明になる場合もある。例えば次の例はどちらの意味か判断し難い。

六月中 (チュウ／ヂュウ) にこの仕事を終わらせて下さい

これらの問題については、水野義道 (1984) や丹保健一 (2001, 2) などですく論じられるが、本稿では、このような例は文脈によって生じるものとし、それ以上の考察

は行わない。ここでは、両者の対立例が確認され、基本的意味に【範囲内】【範囲全体】があることが分かればよい。

- 7) なお鈴木 (2014: 78) では「井原西鶴」から得られた用例として「逗留中」をあげる。しかし、当該資料がいずれかは明らかにされない。同論ではJapanknowledge所収の「日本国語大辞典」を主資料としているが、当該の範囲では確認できなかった。

この点の補足として、「新編日本古典文学全集」所収の「井原西鶴集」から「逗留」に限って用例を確認する。「西鶴集」の範囲では「チュウ」「ヂュウ」に関わらず、「逗留中」の例は確認されない。一方で、和語表現である「逗留のうち」は5例確認できた。以下に内3例を挙げておく。

大阪に逗留のうちに一日は野郎もよしや。『好色一代男』巻五「今こへ屁が出物」
或は十日・二十日・三十日も、逗留のうちは寝道具のあげおろし、朝夕の給仕、
(中略) 自由につかひて、立ちざまに一步をとらせば、金めずらしくよるこぶ事
なり。 同巻三「木綿布子もかりの世」
長崎に逗留の内、終に丸山の遊女町をのぞかず。

『世間胸算用』巻四「長崎の餅柱」

西鶴作品のすべてを確認しているわけではないが、この範囲における「逗留のうち」は、接尾辞「チュウ」が存在しているのであれば、いずれも「逗留中」で表しうるはずの例である。そのため、用例を確認する必要があるものの、(4)～(7)で確認した使用差や、このような傾向から、やはり、当該時期の口語において、接尾辞「チュウ」に生産性を認めないという判断が妥当だろう。

この他、西鶴作品の内『好色五人女』に「留守中」が確認されるが、「中」には「ぢう」の振り仮名が振られる。

思ひ立旅衣、室町の親里にまかりて、あらましを語しに、我娘の留守中 (ぢう)
を思ひやりて、「萬にかしこき人もがな、跡を預て表むきをさばかせ、内證はお
さんが心だすけにも成べし」と、 『好色五人女』巻三「姿の関守」

この文脈は【娘の留守全体を思いやって】と【範囲全体】の意味で解釈可能であり、【範囲内】の確例とはならない。

- 8) ただし、「チュウ」の項目に‘throughout’とあるのはむしろ【範囲全体】といえ、やや疑問が残る。しかしここでは、他の語釈が【範囲内】であり、「ヂュウ」には【範囲内】にあたる語釈がないことを重視すべきだろう。
- 9) この方針は、山田 (2019) における中世末期・近世初期の記述結果と現代語との比較に基づく。同論では当該時期に接尾辞としては【範囲全体】をあらわす「ヂュウ」のみがあらわれるとする。この状態から現代語へと至る過程で、接尾辞「ヂュウ」が【範囲内】をあらわす用法を獲得し、さらに「チュウ」へと分化するとは考えにくい。それよりも、【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」が新たに生じたとするほうが妥当である。このことから、新たに【範囲内】の意味をもち、「中」字で綴られる接尾辞が生じたとすれば、清音の「チュウ」と推定できる。

以下の考察においてはこの通りの方針をとる。ただし、「うち」や「ナカ」と読む可能性が高いものは、除外する。この方針は、「ヂュウ」が【範囲内】をあらわしているとみなさざるを得ない用例が確認された場合、修正を必要とする。

- 10) 次の2例は、類似の例ととれるが、【範囲全体】の接尾辞「ヂュウ」である可能性が

残るため、対象外とした。

- a. ヤレ\／けふは大義じや。もはや是から帰つたも。留主中万事気を付てたもれ。そなたも随分まめでるやれと斗いふて、

『軽口笑布袋』延享四 (1747) 年

- b. △男 そふである。其太夫といふものは、おまへがつれていてじやあつた新町の太夫とは、工合のちがふたものかな△親仁 イヤもふ、ちがふたのちがふのといふやうなことじやない。滞留中のもてなしくあひといふものは、とんと格別な物じや。どんなものでもほれさしおる。

『小倉百首類題話』文政六 (1823) 年

意味については、文中における述語があらわす動作や状態が、「中」で示される空間・時間のすべてに及ぶ可能性がなければ、【範囲全体】ではないとし、排他的に【範囲内】の確例と判断した(例えば、「夏休み中、二回海に行く」のように回数で限定される場合などは、毎日その動作が行われているといった可能性が否定できる)。aは「留主」の時間を対象に、話者が「気を付ける」という動作を聞き手に指示する。この行為は、ある程度の範囲を持ったものであり、この文脈における「留主中」が【範囲内】を指すか【範囲全体】を指すかは、厳密には判断できない。また、bの「滞留中」についても同様で、「もてなす」動作が滞留の範囲全体に及ぶか否かは判断できない。これらは存疑例として保留する。

- 11) この他、日本語歴史コーパスにおいて「洒落本」「人情本」を対象に「中納言」を用いて検索を行った結果、洒落本類にはいずれの地域においても接尾辞「チュウ」ととれるものは確認できない。一方で、江戸語資料としての人情本類には、ほぼ同時期に【範囲内】をあらわす接尾辞「チュウ」と判断しうる例が確認できる。会話文で、ほぼ確実に【範囲内】の例と判断できる例であれば、次の「病氣中」が該当する。これは、次に続く「流浪の間」との対比から同じく時間的な「間」とみるべきだろう。

ごもつともでござりますが、後へ残せしお松と申すは、子供ながらもわたくしの病氣中から長々の流浪の間も、大切に介抱いたし呉まして、世に便りないみなし子ゆゑ…
滝亭鯉丈/為永春水『明烏後の正夢』文政四 (1821) 年序

- 12) 同論では「育児中の主婦」のような連体修飾のものも含める。
13) 宝暦十二年八月二十七日の記事などに「本理院 (鷹司孝子)・深徳院 (大久保須磨)・浄円院 (巨勢紋子)・至心院 (梅溪幸)」が挙げられる。
14) 例えば亀井孝ら編 (2007: 238-258) では、多くの課題を残しつつも、近世期の庶民層における漢語浸透について、日本語諸方言を射程におきながら考察する。
15) なお、現代語の接尾辞「チュウ」が、和語のアスペクト表現「テイル」などと異なる点については、大島弘子 (2010) を参照。

参考・引用文献

大島弘子 (2010) 「漢語接尾辞「～中」によるアスペクト用法」『漢語の言語学』くろしお出版

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房

亀井孝ら編 (2007) 『日本語の歴史5 近代語の流れ』平凡社ライブラリー

鈴木豊 (2014) 「字音形態素「チュウ (中)」と「ジユウ (中)」の関係について」『文京学

院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』13

丹保健一 (2001) 「現代日本語における漢語系接尾辞「～中(チュウ)」 「～中(ジュウ)」の使い分けをめぐる」 『国語語彙史の研究』 20

—— (2002) 「接辞的造語成分「中(チュウ)」 「中(ジュウ)」の使い分けについての覚え書き—— 「午前ちゅう」「午後じゅう」「夏じゅう」「冬じゅう」を中心に——」 『国語論究』 10

水野義道 (1984) 「漢語の接尾辞的要素「～中」について」 『日本語学』 3-8

森田良行 (1984) 『基礎日本語3』 角川書店

山田昇平 (2019) 「漢語接尾辞「チュウ」「ヂュウ」の歴史—中世末・近世初期における—」 『訓点語と訓点資料』 143

参考・引用資料

※ 『新日本古典文学全集』 (小学館) = 「全集」、 『日本古典文学大系』 (岩波書店) = 「旧大系」、 武藤禎夫、 岡雅彦編 『断本大系』 (東京堂) = 「断本」と略す。

『法華経音義補闕』 : 『法華経音義類聚 坤』 (本願寺 一九七二)

『西鶴諸国ばなし』 : 「全集」、 及び稀書複製会 『西鶴諸国はなし』 (米山堂 一九四〇、 閲覧は国会図書館デジタルコレクションによる <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1139960>、 7 [巻二・三、 請求記号307-94]・最終閲覧2020/8/29 17:00)

『好色一代男』 : 「全集」、 及び早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_01607/) [請求記号へ13_01607]・最終閲覧2020/08/29 17:05

『世間胸算用』 : 「全集」、 及び早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_01601/) [請求記号へ13_01601]・最終閲覧2020/08/29 17:08

『好色五人女』 : 「旧大系」、 『好色五人女』 (勉誠社文庫 1976)

『傾城禁短気』 : 「旧大系」、 宝暦八年版—早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる (https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0271/) [文庫31 E0271]・最終閲覧2020/08/29 17:10

『和英語林集成』 第三版 : J・C・ヘボン著・松村明解説 『和英語林集成』 (講談社学術文庫 一九八〇)

『安愚楽鍋』 : 国会図書館デジタルコレクションによる (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/882304>) [巻二、 請求記号245-9]・最終閲覧2020/08/29 17:12

『臍の宿かへ』 : 『国立国会図書館所蔵 江戸咄本集 DVD復刻版』 (ふじみ書房2011)、「断本」による

『会席断袋』 : 宮尾與男編 『上方咄の会本集成』 (和泉書院2002)、「断本」による

『梅屋集』 『軽口笑布袋』 : 「断本」のみによる

『小倉百首類題話』 : 「断本」、 早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he13/he13_02742/) [へ13_02742]・最終閲覧2020/08/29 17:15

『明烏後の正夢』 : 東京大学文学部国語研究室が公開する「日本語史研究資料」による (<http://kokugo.u-tokyo.ac.jp/data/bunken.php?title=nochinomasayume>) [4L:95:

1～5]・最終閲覧2020/08/29 17:18

『広橋兼胤公武御用日記』：東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」による

使用データベース・索引

株式会社ネットアドバンス “Japanknowledge” (<https://japanknowledge.com/>)

国文学研究資料館「断本大系本文データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon>)

国立国語研究所 (2019)『日本語歴史コーパス』バージョン2019.3 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」(<https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>)